

お正月新聞

—2026年号—

創刊号

VOL.1

一
十

令和8
2026

干支縁起オブジェ
富宇加淳・作



m9デザインのお正月新聞創刊。

あけましておめでとうございます。本年もかわら

ぬごひいきのほどをよろしくお願ひ申し上げます。

さて、近年の年賀状トレンドは、「本年をもちまして、年賀状でのご挨拶は終了させていただきます」と、年賀状終了のお知らせを一言添えたもの。とりわけ法人の方々からのこの終了のお知らせは年々増え、当然、送られてくる年賀状も年々減っています。

なるほどこれはたいへんだ、この流れにはのらない

と。つまり2026年の弊社年賀状も、これを宣言して、最後の年賀状にしようと考えました。

でも待つて、新しいものには、すぐにのりたいおつちよこちよいが信条の弊社としては、この流れにのるには遅すぎませんかという、いかにもアホな意見。いやいやだからね、たとえ経費削減の体のいい口実であれ、これは環境問題であるし、企業としてはその意識の表明でもあるわけでしょ。だったら、早いも遅いもないし、気づいた人からやめていこう。そういう問題ですよね、と、ホツとする正論も。

など、喧々諤々の会議の末、ビールを飲みながら決まったのが、この「m9デザインのお正月新聞・創刊」。環境的にはより険しい、カーボン増加の特大紙面。つくづく申し訳ありません。理由は、やはり面白そう。加えて、弊社のふざけた年賀状を楽しみにしているという声もあつたりなかつたり。いずれにしても、終わりは、さびしいじゃない。というわけで、この試み、せめて、僕らのみならず読まれる方にとつても、少しでも楽しんじただけたら幸いです。つまり、弊社のフィジカルな年賀状は続く。

目次

【M9デザイン誕生秘話】

弊社設立のキーパーソンリキさんと語るM9デザインのこと

感謝感謝！10年クライアント【第1回】ラッパ屋さん

頼りにします！m9dの仲間たち①校閥の高松恭則さん

編集後記

4コマ漫画「エムキュウくん」

設立21年目記念
m9デザイン
誕生秘話



弊社設立のキーパーソン

m9デザインのこと

リキさんこと、鈴木力さん。集英社の名物編集者として2006年に退社されるまで、『月刊明星』、

『月刊PLAYBOY』を経て、『週刊プレイボーイ』、『イミダス』の編集長を歴任、まさに『雑誌ジャーナリズムの黄金期』を駆け抜けて、さらに『集英社新書』の立ち上げと、その経歴は輝かしい。などと言

うと「やめてくれ」と仰るに違いありませんが、退社されて20年の今なお、各方面からひっぱりだこの「みんなのリキさん」です。近年は、『鈴木耕』のお名前で『デモクラシータイムズ』や『マガジン9』など、ウエブメディアで活躍中。そう、弊社、「m9デザイン」は、そんなりキさんによつて生まれたと言つても過言ではないんです。ということは、当時の懐かしい、いきさつを、昨年80歳を迎えたリキさんとご飯を食べながら、あらためて。

まずは、1989年、初めてのリキさんとの仕事、単行本、『荒俣宏 日本妖怪巡礼団』の装幀の話から。



※1 荒俣宏著「日本妖怪巡礼団」1989年・集英社

m9d リキさんの第一印象は、「会つたことのない大人」でした。こんな大人がいて、こんな大きな会社で出世もされて。世の中、捨てたもんじゃない、いじやんと、えらそうですが、ほんとにそう思つたんですよ。

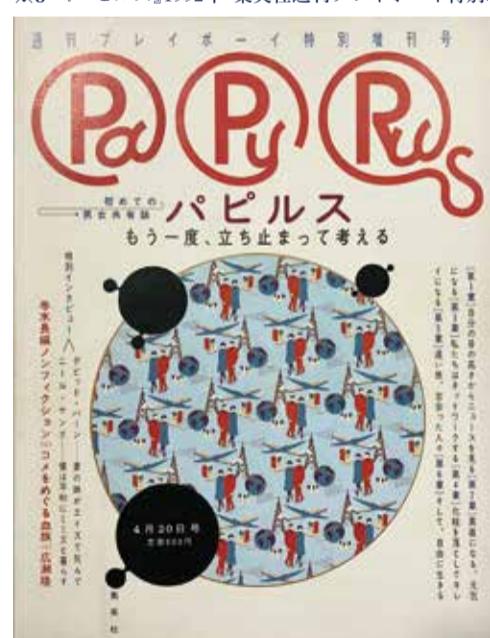
R うん、その夜桜の写真を本のカバーに全面にグリットと巻いたデザイン、あれは新鮮だったよ。

m9d たしか、水野くんの紹介だよね。R うん、その夜桜の写真を本のカバーに全面にグリットと巻いたデザイン、あれは新鮮だったよ。

巡 靈 団

やっちゃんとてます。

※3 『パビルス』1992年・集英社週刊プレイボーイ特別増刊号



もくじ 第1章 自分の目の高さからニュースを見る
第2章 素直になる・元気になる
第3章 私たちはネットワークする
第4章 化粧を落としてキレイになる

第5章 遠い旅、出会った人々
第6章 そして、もっと自由に生きる
巻末長編ノンフィクション
「コメをめぐる血族」廣瀬隆

「氣」が癒やす
1992年
週刊プレイボーイ別冊・集英社ムック
板橋雅弘著
『夢のいる場所』
1990年・集英社
リキさん関連の本



R たしか、水野くんの紹介だよね。m9d はい、水野さんに連れられて『週プレ』の編集部に、で、初めていただいた仕事が、『荒俣宏 日本妖怪巡礼団』の装幀。これ使ってねと渡されたのが、夜桜の写真。

R うん、その夜桜の写真を本のカバーに全面にグリットと巻いたデザイン、あれは新鮮だったよ。

m9d デザイン案を持って編集部に行つたときのことよく憶えています。リキさんが「よし」と仰つて仰つて、そのまま、いた、著者である荒俣さんを訪ねたんですね。

R 夜も遅い時間でしたが、荒俣さんに『月刊明星』についてのうんちくを一晩中、外が明るくなるまでうかがいました。荒俣さんが「本の帯を外したら幽霊が隠れてたりしてね」みたいたなアイデアも出されたりして、不思議で楽しい時間でした。

R そうか、そんなことあつたね。

m9d もはや、デザイン意図も忘れましたが、河原で拾ってきた石を金色も誤植の思い出。本表紙(カバー)を外した、本体の表紙)のタイトルの文字。「巡礼団」の「礼」が「靈」で刷られてしまつた。河原で拾ってきた石を金色に塗つて、その石の撮影のためだけに集英社のスタジオで何時間も費やしたりしてさ(笑)。

R そうか、そんなことあつたね。

m9d はじめてお会いした時、リキさんは、「週刊プレイボーイ」(以下週プレ)の副編集長。すごい大人に見えましたけど35年前、つまりリキさんが45歳! 僕らも20代。1989年、昭和が終わって平成がはじまつた年です。

R そうか、天皇崩御。『週プレ』もグラビアのヌードを自虐したりしたね。ベルリンの壁が崩壊したり、天安門事件があつたりと、なかなかの年に出会つたんだね。

m9d 確かに荒俣さんっぽいイタズラ感ありますもんねつて、チェック漏れとはい、本当にすみません。。。

R でもね、この仕事で、君らのこと、面白い子たちだなあつて思つたんだ

m9d 僕らは当時、「ファイブ・ワン」というデザイン制作会社に属して、メインの仕事は、広告代理店を挟んだ企業の広告系でした。だから、ときどきリキさんから、いたたかの仕事は、新鮮で楽しかった。

そんな流れでお願いされたのが、『パピルス』のデザイン。1992年。僕らもリキさんとの仕事の中で、最も印象深いのがこれです。全160ページ、しかも創刊号をまるつと駆け出しの僕らに任せるつて、当時はただ楽しいだけでしたけど、あらためて考えると、ちょっと震えます。

R 『パピルス』は、もちろん僕も印象深い。僕が副編集長だった当時の『週プレ』は、けつこう売れていたんだけど、グラビアとか若い男性向けコンテンツだけではなく、政治や国際情勢の記事なんかもそれなりにあつたわけ。で、ちょっと震えます。

R いや、デザインやレイアウトも斬新だったよ。普通、雑誌のレイアウトと言えば、だいたいが基本のテンプレートにはめていくじゃない。それがもう記事ごとにまったく異なるといふね。

R そもそも「雑誌」のつくり方をよくわかっていないかったということもあると思いますけど(笑)。

R まあ、でも、売れなかつたんだなこれが、いろいろな事情もあつたけど、2号目は出なかつた。

m9d 週刊新聞の創刊は、1989年から15年間、毎年、ほぼ30歳の佐藤社長が入り、彼の知れない人たちが入り、徹夜ばかりの日々が続いた。でも、楽しかったのは事実。でたらめな僕らを目の細めて受け入れ、続けてくれた佐藤社長。昨年、ほぼ30歳の佐藤社長が入り、彼の知れない人たちで、そんな佐藤社長を開催(写真左)。

※4 「ファイブ・ワン」株式会社「ファイブ・ワン」は、1989年から15年間、毎年、ほぼ30歳の佐藤社長が入り、彼の知れない人たちが入り、徹夜ばかりの日々が続いた。でも、楽しかったのは事実。でたらめな僕らを目の細めて受け入れ、続けてくれた佐藤社長。昨年、ほぼ30歳の佐藤社長を開催(写真左)。

※2 「水野さん」水野義和さん。当時、集英社「月刊明星」の編集者で、僕らの仕事を目とめて声をかけてくれた方。アイドル系の仕事を沢山させていました。2022年のご逝去は、くらんでも早過ぎました。左は、水野さんとの印象深い仕事、田原俊彦写真集「祝9年」(1989年)。



原案:ChatGPT5.1 絵:JunTomioka



稽古風景から (写真:木村洋一さん)

あれは1993年の春のこと。当時、私は広告代理店のコピーライターで、社内にはまだバブルの残り香が漂っていた。何かの用事で営業局を覗くと、顔見知りの局員が色校正刷りをチェック中である。某得意先のパンフレットらしい。「いいね、それ。デザイナー誰?」「芹沢さんです。イラストは富宇加さん」。芹沢氏の事は知っていた。センスはいいが午後4時に出社するので多少問題のある人だった。富宇加氏のことは知らないかった。だがそのイラストを見た時、私はピンと来たのである。「これだ。次のラッパ屋のチラシはこの人たちに頼もう」。

かくして私が主宰する劇団、ラッパ屋の第16回公演「アロハ颶風」のチラシが出来上がった。だがそのイラストを見た時、私はピンと来たのである。「これだ。次のラッパ屋のチラシはこの人たちに頼もう」。

鈴木聰(すずき さとし)脚本家、演出家。1959年東京都生まれ。1982年博報堂に入社。コピーライター、クリエイティブディレクターとして活躍。1984年、劇団「サラリーマン新劇喇叭屋(現ラッパ屋)」を旗揚げ、以来全作品の作・演出を担当、「大人のエンターテイメント」を目指し、特に社会人男性の観客層を開拓。演劇のみならず、NHK連続テレビ小説「あすか」「瞳」、テレビ東京「三四のおっさん」などテレビドラマや映画、新作落語まで幅広く執筆。第41回紀伊國屋演劇賞個人賞(2006年)、第15回鶴南北戯曲賞(2012年)受賞。

長くつねあるデザインを、人々のたちは生んでくれる。

ラッパ屋主宰 鈴木聰

感謝感動!
10年
クライアント

【第1回】

劇団『ラッパ屋』さん

10年を超えるお付き合いのお客さま、感謝を込めてご紹介するふりをしながら、弊社を存分に褒めてもらおうというJの「コーナー」。栄えある? 第1回は、10年どころか30年超えのお付き合いの『ラッパ屋』さん。ウェブサイトや毎年恒例の紀伊國屋ホール公演の宣伝美術をお手伝いしています。『大人のエンターテイメント』を目指し、長きにわたり各方面で活躍中のラッパ屋主宰の鈴木聰さん。お忙しい中、無理くり寄稿をお願いしましたら、僕らの実像を超えて流石の筆が走っています(笑)

な島でアロハの青年がウクレレを弾き、娘がフラダンスを踊る。いい懐かしい昭和の気配だが、どこか現代的な風通しの良さがある。オーソドックスではあるが、ディテールにユニークな工夫と味がある。なにより楽ししそうで温かい。レトロでモダン。技が

あってヒューマン。時代をしっかりと捉えた

質の高いエンターテイメント。私が目指す芝居はまさにそれなのだ。ラッパ屋かく

あるべし。二人が作ってくれたチラシは、そ

う言つてくれているようだ。

以来、33年。リーディング公演なども含め

るト40作以上のラッパ屋のチラシを二人は

作ってくれた。それだけではない。H.P.やパ

ンフレットや劇場で売るグッズなども。

芝居はチーム作業である。表に出るのは

俳優、脚本家、演出家が主だが、各スタッフ、

お手伝いの人たちが力を尽くして一つの舞

台が出来上がる。「一人はすっと、この33年間、

ラッパ屋のチームの一員でいてくれたのだ。

芹沢氏と富宇加氏を信頼できるのは、そ

の仕事が単に紙の上(ディスプレイの上)で

はないことだ。課題の本質を捉え、クライア

ントの意向を受け止め、時代の風の変化を

繊細にキャッチしながら、その結晶がデザ

インとなりイラストになる。二人との打ち合わせ

はいつも楽しい。その言葉やアイデアはいつも私

を刺激してくれる。

さて、2026年。よ

つぱなから、凝りに凝つ

た年賀状がわりの新聞を作ったものですね。今年

もよろしくお願ひします。

早いですが、次のチラシはどうしましようか?

は、こちらの提案が通るどうかは

んとうTVドラマもありました

が、校閲、僕らも本の仕事をするま

で馴染みがありませんでした。い

わゆる「文字校正」とはまったく違

いますよね。

高松さん(以下高松)いえ、その「校

正」の部分もあるのですが、書かれ

ている内容の真偽、固有名詞や年号

などの数字の正しさも確認しますし、書かれ

ている内容の真偽、固有名詞や年号